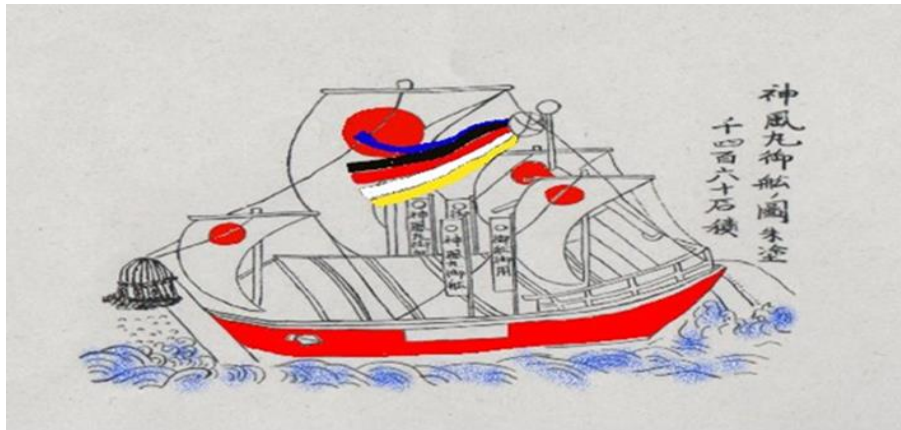


ほったにすけさいこう 特集 堀田仁助再考

— 評価されない裏事情を解き明かす —



相州浦賀で新造された朱塗唐風の「神風丸(しんぷうまる)」1460石積
(蝦夷地開発記／鈴木周助 15・16頁より画像ソフトでイメージ加工)

令和5年(2023)11月

y.arase

《1部》

目次. 1部

[はじめに](#)

[1. 時代背景と堀田仁助の事蹟](#)

[2. 主な堀田仁助関連の参考文献・史料](#)

[3. 史料から知り得た真相について](#)

[4. 羽太の休明光記の錯誤の意味とは](#)

[5. 堀田仁助の由緒書 準拠抜粋表](#)

はじめに。

この特集で取り上げる堀田仁助（延享2年（1745）～文政12年（1829）9月5日）は、江戸時代の天文学者であり、江戸幕府天文方で編暦・測量を行った。伊能忠敬の蝦夷地測量に先駆けて、初めて江戸から船上で天文観測をしながら、沖乗航法で東蝦夷地海路開拓を成し遂げ、地図制作を行った。

元和六年（1620）石州津和野藩亀井家は、廿日市に「船着ノ蔵屋敷」を置いた。この時代はまだ参勤交代などに利用できるような宿泊施設はなく、廿日市商人 鳥屋七郎右衛門宅へ宿泊していた。しかし、なにかと不便につき、廿日市内へ宿泊施設を望んだ津和野藩は、本陣鳥屋市右衛門・廿日市庄屋山田治右衛門両人を仲介にして広島藩へ用地の提供を願い出た。

「寛永七年（1630）十一月御相談首尾能相整御許容之御返答有之、・・・」と許可の回答あり・・・。
翌年、津和野藩から願い出された廿日市船屋敷地が、寛永八年（1631）五月十八日、次の通り許可・受け渡された。堀田仁助は、延享二年（1745）ここ廿日市船屋敷で生誕。

桜尾之方屋敷東側	竹藪之方四十間	御船入ハ桜尾城山林麓東之方
御方大屋方	北之方五拾三間	湊岸畑よりエボシ岩迄沖之方三十三間
廿日市町之方	西之方五拾三間	湊岸畑柱横七間半
浜之方	南之方五拾四間半	山之手百拾九間
		エボシ岩横二十間

寛永八年（1631）以降、廿日市東端に位置する小丘桜尾山にあった中世の城跡、桜尾城址（いまの桂公園）の西一帯の地に、石州津和野藩御船屋敷が設けられた。参勤交代など上方との往来には日本海ではなく、陸路津和野を発ち、津和野街道を南下し、六日市本陣、大原本陣、廿日市の船屋敷に止宿、この船屋敷がいわば下屋敷でここを中継して瀬戸内海を海路兵庫県室津まで往来していた。

船入地は桜尾山東麓のエボシ岩あたりに置かれていたが明暦二年（1656）船入地移転が認められ、船入地・御船屋は、桜尾山北側で西国街道に面した位置に移転された。

・(次頁左図) 参勤交代の御船行列図

・(次頁右図) 旧山陽道行程記図 部分

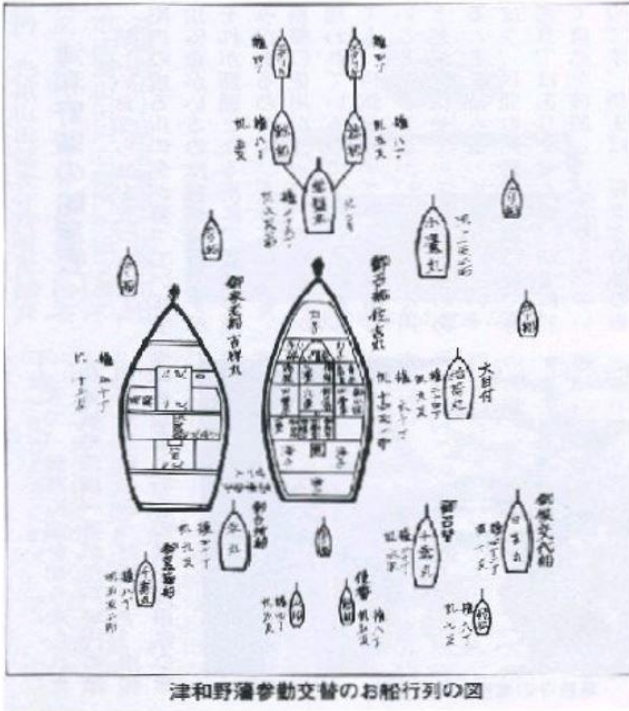
- ① 桜尾山 かつては桜尾城 厳島神社神主家の居城であった。慶長五年（1600）関が原の戦後、毛利氏が防長へ転封（領地の移し換え）になり、毛利氏支配の終焉に伴い、桜尾城は次第に荒廃していき、樹木が生い茂る小高い山に成り果てる。そして広島藩の御建山（おたてやま）となった。承久（じょうきゅう）三年（1221）鎌倉幕府御家人 藤原親実以来、約 400 年続いた桜尾城の幾多の歴史はここに静かに終わりを告げる
- ② 西国街道に沿って長屋門、奥に番所、役人小屋、船頭や水主（かこ・乗組員）の長屋などからなる津和野藩の御船入の港があり、住吉丸（330石）・吉祥丸（250 石）・御紙船ほか二十三隻が播磨国姫路藩領室津までの海路のため、係留されていた。
- ③ 桜尾城址の西麓に石州津和野借屋舗。
元和六年（1620）、広島藩との合意のもとに東西五十間、南北三六間の「船着ノ蔵屋敷」が設けられたが、宿泊施設は整っておらず、廿日市の鳥屋七右衛門方を定宿としていた。

2:

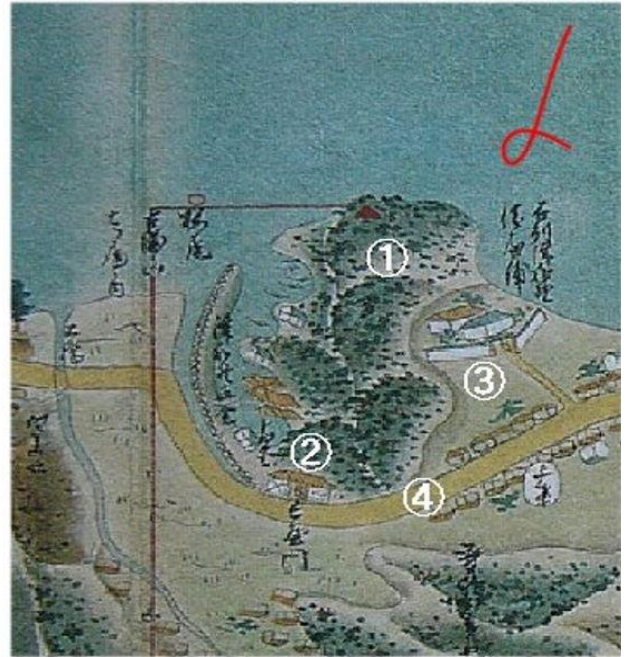
しかし不便なために寛永八年(1631)頃に船屋敷として整備された。

屋敷内には、御殿、船蔵、土蔵、御紙蔵、定詰（一定の場所に勤務するために生活する長屋）などの施設が建てられ、元年(1736)頃には、九十三人の家中が居住していた。

④ 西国街道

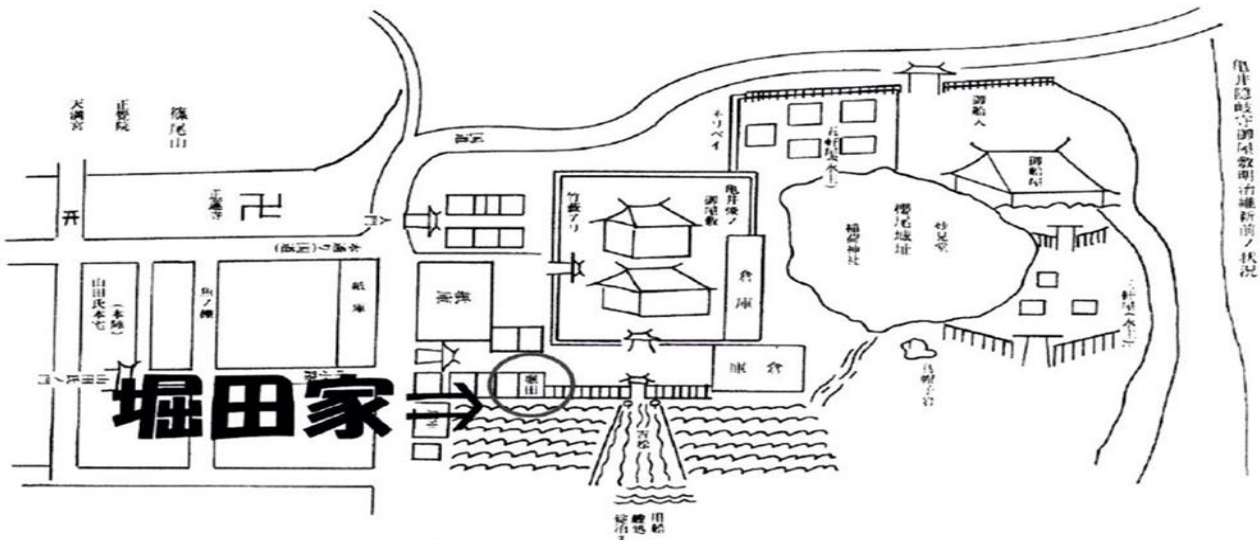


津和野藩参勤交替のお船行列の図



旧山陽道行程記 寛保2年(1742)
(毛利家 絵図方 有馬喜三太作) 加工

有馬喜三太 (ありまきそうた)



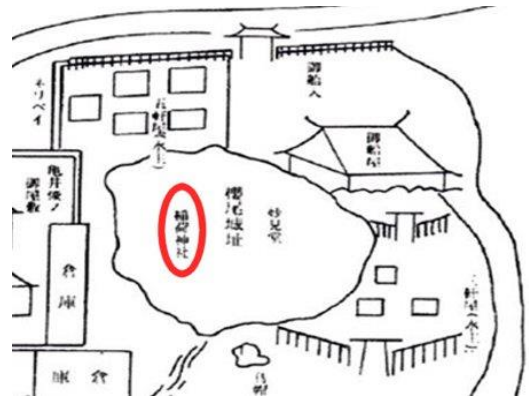
「明治維新前の廿日市蔵屋敷絵図の東側の一部」—廿日市町役場蔵—

③ 桜尾城址の西麓に石州津和野借屋舗（中央の円内が堀田家）。

現在海は干拓され、国道2号（宮島街道）が走っている。

(参考:「懐古的フォト」—「歴史再発見 (桜尾山)」—「桜尾山」)

いなりだいみょうじん
稲生大明神



津和野 ^{たいこだにいなりじんじや}太鼓谷稲成神社の分身を祀る稲生大明神は、津和野藩御船屋敷に祀られていたものである。石燈籠に寛政三年（1791）の寄進とある。

（註）津和野太鼓谷稲成神社

鼓⇒鼓 荷⇒成

☆ 何故か、功名^{こうみょう}を論ぜられない堀田仁助

^{げいしゅうはつかいちつわのほんふなやしき}芸州廿日市津和野藩船屋敷に生まれた堀田仁助の功名を論ぜられぬ要因を 2006 年以来追い求めてきたライフワークも早や 17 年。

律義で実直そうなイメージが浮かぶ堀田仁助ですが、世渡り下手なのか不運が続きます。寛政暦改暦にはほとんど関与せず当時、初代渋川晴海以降昔の面影はなく、やっと家名を維持するに過ぎない。天文方筆頭とは名ばかりの非主流の斜陽な家柄の渋川家 6 代光洪^{みつひろ}の養子正清^{まさきよ}に仁助は師事します。養子縁組を繰り返しながらも幕末まで継承された渋川家ではある。

しかし高橋至時^{たかはしよしとき}の次男景佑^{かげすけ}が、文化五年（1808）八月 8 代渋川正陽^{しぶかわまさてる}の養子となり、9 代を継ぎ、同年（1809）七月 天文方になってからは、面目を一新したのである。時に堀田仁助 65 歳であった。

非主流の斜陽な家柄の渋川家に師事した堀田仁助の不運の数々。

^{かんせい}寛政十一年（1799）6 月 15 日と 6 月 27 日の歴史の悪戯^{いたづら}。

仁助最大の不運は、蝦夷地へ出立の二週間前に師^し渋川正清が亡くなったことであろう。

堀田仁助没後（1829. 9. 5）、今年 2023 年で 194 年経つ。

サブタイトルの「評価されない裏事情を解き明かす」という切り口で、長年の集大成として加筆修正し、「頭のしっかりしている内に「堀田仁助再考」にまとめ上げ、ここに堀田仁助を偲び休筆とす。

[\[目次に戻る\]](#)

1. 時代背景と堀田仁助の事蹟

先ず、時代背景を確認し、堀田仁助の事蹟（事実の痕跡）とはなにかを押さえておきます。
十一代将軍徳川家斉御世、ロシアの南下政策やプロトンの蝦夷地再航に危機感を募らせた幕府は、これを契機に北辺防備の急務を痛感する。

寛政十年（1798）一月、五百人の津軽藩士を渡海させ函館の警備に当たらせ、また、この年三月から十一月に目付渡辺久蔵ら百八十余名よりなる大調査団を蝦夷地に派遣し、北辺の事情を探らせる。天明五～六年及び、寛政二～四年に次ぐもので、幕府の高官を派遣して東西蝦夷地を巡見させ、蝦夷地の警備とともに経営の方策を調査させる。

その結果、千島のウルップ島に再びロシア人植民者たちの居住が知られたので、幕府は翌寛政十一年（1799）正月、東蝦夷地すなわち知内村知床岬に至る一帯およびその属島を七年間仮上地（地行地を没収）することを決定し、書院番頭松平信濃守忠明、勘定奉行石川左近将監忠房、羽太庄左衛門正義、使番大河内善兵衛政寿、勘定吟味役三橋籐右衛門成方ら五人の有司（官吏）を蝦夷地取締役御用掛に任命（江戸での事務の任は石川・羽太）し、この地を幕府直捌（直接経営のこと）とし、五人に従う諸役人七十名がそれぞれ決定され、警備と開発及びアイヌ民族の懐柔政策に着手する。その後、幕吏の江戸出立が続く。

こうした緊迫した北辺の状況の中、会所の運営、道路開削、橋建設、渡船場設置、宿駅・休所開設、人馬の配置、継送・陸路の整備により人の往来の自由を確立し、迅速かつ大量の物資を移出入するため、幕府は東蝦夷地への直通航路の開拓を急務としていた。

蝦夷地開拓という一大事業は、一能に秀でた有望な士、[最上徳内](#)、[近藤重蔵](#)、[間宮林蔵](#)、[松田仁三郎](#)（元伝三郎）、[伊能忠敬](#)や幾多の士が北辺を舞台に活躍したのである。

ここで述べる堀田仁助とは

延享二年（1745）芸州廿日市津和野藩船屋敷にて伊藤嘉助（伊藤嘉平衛次男）の子として生まれ、天明二年（1782）天文方渋川家の歴作御用手伝として天文などに長じ、寛政十一年（1799）五十五歳のとき、幕命を受け、船上から測量をしながら東蝦夷地への航路を開くために江戸から「神風丸」に乗船し、宮古からは幕府の望む沖乗り航法で、船上から天文観測をしながら針路を決めるという画期的な手段をもって、アッケシに至り、江戸からアッケシへの最短の東蝦夷地海路測定をやり遂げたのである。アッケシからは松前、奥州と陸路で帰府。のち、堀田仁助は、「従江都至東海蝦夷地針路之圖」を完成させ幕府に上程した。道中の詳細について、仁助は記録に残しておらず、仁助見習浪人鈴木周助の道中手扣「蝦夷地開発記」写本文化元年（1804年）成立が唯一残されている。しかし、仁助の事蹟を証明できる唯一の写本は昭和（1932）に発見されたが、如何せん写本の成立からその発見までに128年の空白の歳月が流れているのである。世

間に知られず、一世紀以上の空白が仁助の事跡を飲み込み、世間から忘れ去られた魔の空白となった。

[《トップページへ》](#)

2. 主な堀田仁助関連の参考文献・史料 一覧.

(主に Google 検索で 2006~2013 頃まで集中して入手した一部)

1. 「蝦夷開発記」鈴木周助 写本文化元年(1804年)成立 (北大北方資料室データベース)
2. 「休明光記」羽太庄左衛門正養 写本 文化4年(1807年)成立 (北大北方資料室データベース)
3. 「休明光記附録 1」羽太正養 同上
4. 「北夷談」松田任三郎 寛政11年(1799)一文化5年(1808)文化5年成立
(国立国会図書館デジタルアーカイブ)
5. 「北海道志 卷二十六」開拓使/編 政治測量 大蔵省明治17年(1884)刊(札幌中央図書館蔵)
6. 「北海道志 卷二十八」開拓使/編 政治海運 大蔵省明治17年(1884)刊(札幌中央図書館蔵)
7. 「北海道と島根縣」札幌島根縣郷友會 昭和6年(1931)刊(北海道立図書館蔵)
8. 『堀田仁助の蝦夷地海路測定事蹟 一新資料「蝦夷地開発記」に就いてー』 [高倉新一郎](#)
蝦夷往来 第9号 別刷 札幌 尚古堂 昭和8年(1933)(北海道大学附属図書館蔵 高岡・松岡旧蔵パンフレット目録) A4版 4枚
(近隣の江別市情報図書館に依頼し、有料でA4判4枚のコピーを入手)
9. 「休明光記」羽太庄左衛門正養 北方未公開古文書集成 第4巻所収
「エリート官僚が書いた休明光記」寺沢一、和田敏明、黒田秀俊/編 叢文社昭和53年(1978年)
(広島県立図書館蔵)・・・②の翻刻本
10. 「近世本天文学史上・下」渡辺 敏夫/著 恒星社厚生閣(1986・87年)(広島県立図書館蔵)
11. 「測量日記」1~5巻伊能忠敬/[著]佐久間達夫/校訂 大空社平成10年(1998)(大野図書館蔵)
12. 「日本北辺の探検と地図の歴史」秋月俊幸 北大図書刊行会平成11年(1999)(広島県立図書館)
13. 『史料紹介「蝦夷地開発記」と堀田仁助の由緒書』古代文化研究第17号所収 岡 宏三
島根県古代文化センター 平成21年(2009年)3月・・・①の翻刻本と由緒書(詳細唯一)

古書 難解なくずし字・異体字の解説が壁

苦労して入手した参考文献・史料を読み込む上で一番難儀したのは、くずし字関連本を首っ引きに一文字づつ確認、異体字は、IMEパッドで手書き入力し読めない漢字を調べ単語登録、またユーザー辞書ツールに読み方・コメント登録する。漢字の意味はネット検索。

元号と西暦、干支(十干・十二支)の訓読み等はWikipediaで調べ、効率よく検索するため、表を自作もした。

言い回しも難解である。

堀田仁助の蝦夷地海路測定の幕命は、「えぞちごようおきのおんふねてんもんかたきしぞえきしつかわせそうろうきかきつけ蝦夷地御用沖乗御船天文方差添差遣候儀申上候書付」とか。

6:

ライフワークとして堀田仁助の功名を論ぜられぬ要因を追求するというモチベーションだけで途中挫折しかかりながらも、なんとか持ちこたえてきた17年間であった。

[\[目次に戻る\]](#)

史料検索の難渋 / Google 検索の進歩が味方

堀田仁助（幼名兵之助、のち泉尹^{いづただ} 1745～1829）を知る人は地元でもほとんどいない。歴史好きでも佐方八幡神社の仁助寄進の石灯籠一対を知れば・・・、ただいつまで記憶が残るか？ それだけ地元にあつて先人の事績が世間に認知されていないのが誠に不思議であり、その訳を知りたくなつた。

2006年に偶然堀田仁助を知り、それ以降文献の検索をすれど、公的なものとしては、廿日市市が平成九年（1997）に発行した「図説 廿日市の歴史」（98～99頁）に「津和野藩士堀田仁助」が紹介されているだけだった。しかし、文中に伊能忠敬との関係を「堀田仁助が老齢を理由に自分の代わりとして推挙した彼の弟子であった」のくだりに疑念を抱き、それからこのような忠敬との関係を述べた文献の検索開始、結果は皆無であった。

2006年ネット検索を始め、結果が出ぬまま4年が経過・・・。文献が見つからない調査がいかに苦しいか。ようやく2010年春先から検索結果に変化が現れ始めた。

公的機関も蔵書のデジタル化を推進し始めており、堀田仁助は蝦夷地に関連があるので地元を検索しても期待が持てないことに気づき、蝦夷地なら北海道大学図書館だとの的を絞り、「北方史料データベース」を見つけ、4年掛かりで、探し求めていたであろうタイトルのヒットにつながり驚いた。しかし、それは、如何せんくずし字のため、判読不能な「蝦夷地開発記 / 鈴木周助」（jpg画像）であった。仁助が乗った船のモノクロ画像が掲載されており、感激した。

北大付属図書館北方資料データベース（日本北辺関係旧記目録にあつた（2010年5月15日取得）。9頁に堀田仁助の名前を見つけ翻刻を待ち望んだ3ヶ月後、古代文化研究第17号所収〈史料紹介「蝦夷地開発記」と堀田仁助の由緒書〉を偶然に検索でヒット、販売先の島根県庁より早速購入。

ところで、北海道大学付属図書館北方資料データベースは、北海道大学付属図書館北方資料室等の所蔵資料を収録した8種の目録を、平成5年（1993）から平成20年（2008）にかけて「日本学術振興会：科学研究費補助金（研究成果公開促進費）」の交付を受け構築したものだ。

Google検索エンジンの進歩とデータベースの構築の進行とともに、検索結果が日に日に目に見えて変わってきた。2010年は検索の激動の夜明けの時代と感動した。たまたま、北海道大学付属図書館北方資料データベースで「休明光記」羽太正養（はぶとまさやす）（JPEG画像）（日本北辺関係旧記目録）をヒットしデータを保存していたが、これもくずし字のため判読不能であり1年余りも放置していた。その後、「堀田仁助の蝦夷地海路測定事蹟—新資料「蝦夷地開発記」に就いて—」高橋新一郎をヒット。近隣の江別市情報図書館に依頼、有料でA4判4枚のコピーを入手。読み込むとまさに史料から知り得た驚愕の真相について述べられていた。

それは「休明光記(きゅうめいこうき)」についてである。放置していた「休明光記」羽太正養(はぶとまさやす)(JPEG 画像)はくずし字で判別不能と再度あきらめる。その後、やっとタイトル「北方未公開古文書集成第四巻 休明光記 羽太庄左衛門正養」の翻刻を 広島県立図書館に見出す。「休明光記」は、箱館奉行勤めた著者 羽太正養の 1799 年から 1807 年までの 蝦夷在任中の記録をまとめたものであると前書きにある。

[《トップページへ》](#)

3. 史料から知り得た真相について.

○「^{えぞちかいはつき}蝦夷開発記」鈴木周助 写本文化元年(1804年)成立(北大北方資料室データベース)
昭和7年(1932)1月、高倉新一郎(日本の農業経済学者・歴史学者。北海道大学名誉教授 1902年11月23日～1990年6月7日)は札幌の古書店 尚古堂に於いて、文化元甲子年(1804)十一月 源中なる人物が鈴木から借写したもので、仁助に扨従(こしょう/貴人に付き従うこと)して 蝦夷地に赴いた道中手扣(てびかえ/書きとめておくこと)の「蝦夷地開発記/鈴木周助」文化元年(1804年)成立を発見。ただし、この時点では売りに出されていない。

● 仁助見習浪人 鈴木周助の「蝦夷地開発記」が堀田仁助の事蹟を明らかにする唯一の道中手扣(どうちゅうてびかえ)である。如何せん昭和7年(1932)の発見であるため、寛政11年(1799)から慶応三年(1867)の江戸末期までに発見されていれば、その後の文献に影響があったのではないかと残念でならない。この古書店では、高倉新一郎を介して、堀田仁助関連の貴重な著書が発掘されている。

札幌 尚古堂 二代目代田茂店主が、昭和6年1月に「蝦夷往来」を創刊(これに先んじて大正10年7月に文芸誌「路傍人」を創刊。「蝦夷往来」は第14号。昭和10年まで刊)。
本業の古書の方は「蝦夷往来」に目録を挿入して配布し、その昭和8年(1933)第9号に表題を発見した高倉新一郎が強いて北海道帝国大学図書館に納入してもらった。

しかし、世に出るには余りにも長い空白の時間が、仁助の事蹟を霧散させたといえる。よって事蹟が色あせたのも否定できない。

三点の文献調査

「蝦夷地開発記/鈴木周助」と「休明光記巻之1」文化四年(1807)成立を対比とはいってもくずし字のため判読不能。よって古代文化研究第17号「資料紹介「蝦夷地開発記」と堀田仁助の由緒書 岡宏三」2009年(平成21)3月 島根県古代文化センターより刊行の翻刻を入手対比して初めて驚愕の事実を発見した。

● 「蝦夷地開発記/鈴木周助」では、第一便が「政徳丸」で、第2便が堀田仁助の乗り込んだ「神風丸」のはずが、また、「北夷談」では、松田任三郎が第一便の「政徳丸」に乗り込んだ手記を詳細に書いている。これらの状況から、「休明光記」では、意図的な悪意を感じる記述が羅列されており、エリート官僚羽太正養の記憶違いとはとても容認できない内容である。

8:

なぜなら、初代の蝦夷奉行・松前奉行を務めた羽太の1799～1807年（寛政11～文化4）に至るまでの蝦夷地処置を自ら明らかにした本編9巻と、その参考となる文書類を集めた附録11巻、附録一件物3巻、附録別録4巻の合計27巻からなる。

参考となる文書類を基に休明光記の本編は書かれており、参考文書類18巻を精査すれば、政徳丸、神風丸を錯誤する余地はないはずである。

- 『蝦夷地海路測定事蹟 —新資料「蝦夷地開発記」に就(つ)いて—』高倉新一郎によれば、津和野藩士宮崎幸麿（嘉永三年（1850）～大正八年（1919）没）は、明治維新後上京し、宮内省図書寮に努め、のち仁助の履歴調査に関し、北海道に於ける事蹟は明瞭を欠き、その日付等についても諸説があり定まらず、「後来（今後） 確実の記録世に出づるを待つ」に至っている。

とかく伊能忠敬は英雄視されるのに、何故か堀田仁助は地元ですら知名度が低いのが現状。迅速かつ大量の物資を移出入するため、幕府は東蝦夷地への直通航路の開拓を急務とした中、宮古からは初めての幕府の望む「沖乗り航法」で、船上から天文観測をしながら針路を決め、江戸からアッケシへの最短の東蝦夷地海路測定をやり遂げた、即ち、海運（海上輸送）を確立した。

しかしながら、仁助の履歴のつじつまが合わないのは何を意味するのか。誰かが何かを正当化しなければならぬシナリオがあり、その嘘を隠蔽したいがための裏事情でもあるのか？ その核心を解き明かすことで、知名度が低い謎が明らかになるかもと期待・・・？。

✔堀田仁助が蝦夷地行の命令を受けたのは寛政十一年三月十三日のことである。宮崎幸麿の調査によれば、同年六月二十七日、「神風丸」に乗船、江戸を出発蝦夷地に赴き、八月廿九日アッケシに達し、十一月十五日帰府した事になっている。

「北海道志」には三月二十四日品川を発し六月廿九日アッケシに達した事になっている。宮崎幸麿氏は「北海道志」の説も附記して「日付が違ふ。仁助の乗った船名が違ふ。何れに拠るや疑うべし」と言っているが是には抑々（そもそも）次のような誤りがあるのだ。

昭和8年（1933）札幌の古書店で発見・入手した「堀田仁助の蝦夷地海路測定事蹟」—新資料「蝦夷地開発記」に就(つ)いて—高倉新一郎の中で、筆者は皆が得心する指摘をしている。それは・・・

その根源は「休明光記」にあるという。

高倉新一郎の指摘を検証する前に・・・

史料を読む順番を次のように読むと疑念が晴れることに気づく！！

数年、難解なくずし字・異体字の解説、更に史料の追加検索をしながら同時進行でやるべき作業をしても、核心に迫れないもどかしさ、歯がゆさがあり、日々苦勞の連続でお手上げの時期もあった。そんなある日、ひらめきで、何か重要なことを見逃してしまっている可能性があることに気づき、単純に史料を読む順番を変えてみることにした。すると徐々に視界が暗闇から光明が差す感覚を覚え、これが転機となり、読む順番の重要性を再認識した。

(ポイント)

- ・蝦夷開発記 鈴木周助 写本文化元年(1804年)成立をまず一番に読み、
- ・次に『蝦夷地海路測定事蹟 一新資料「蝦夷地開発記」に就(つ)いて一』を読み、
- ・「北海道志 卷二十八」開拓使/編 政治海運 大蔵省明治17年(1884)を読み、
- ・最後に「休明光記 1」羽太庄左衛門正養 北方未公開古文書集成 第4巻所収を読む。

休明光記は最後に読むのがポイントなり。

羽太庄左衛門正養は、任期3年の蝦夷地取締御用掛のメンバー5人の有司(ゆうし/役人)の一人であり、その社会的信用度から、大蔵省も堂々と「北海道志 卷二十八」を刊行している。休明光記の存在が大きく、訂正される機会を失ったと見るべきか。

《高倉新一郎の指摘を検証》

☆ 仁助に関する乏しい文献・史料を精査した上で明らかになったことは、

何故か腑に落ちない混乱の根源は「休明光記」にあると改めて認識した。

江戸末期来の後世の拠り所となっていた「休明光記」を底本としたと思われる明治17年(1884)刊の「北海道志 卷二十八 政治海運」の記事も当然誤りである。

元津和野藩士の宮崎幸麿にして、北海道に於ける事蹟は明瞭を欠き、その日付等についても諸説があり定まらずと言わしめており、これには同感である。

研究者も人の子(文献少なく研究対象としにくい)、不幸なことにその後もなんら修正されることもなく間違った方向に昭和から現在に続いているのでは・・・。

仁助直近の事蹟を著した「夷地開発記」写本が明るみになったのは、128年後の昭和7年(1932)のことである。

仁助の事蹟に関しては、江戸後期から明治初期迄の文献は、「休明光記1」本編の錯誤(本28~29頁 原文・翻刻)により事実が歪められていたことが「夷地開発記」により白日の下に晒されて、独り歩きしていたことが判明した。

そして77年後の2009年になって『資料紹介「蝦夷地開発記」と堀田仁助の由緒書 岡宏三』が翻刻出版されるまで、一般にはほとんど知られていない状況が続き、そのために、残念ながら、その遅き発見が功偉大にしてその名頭れずの大きな一因となったのではないだろうか。

- 「休明光記1」羽太正養 は、堀田仁助の乗ったはずの船名を「政徳丸」とするが・・・。
一番船は「政徳丸」に間違いはないが、乗り込んでいたのは堀田仁助ではなく、富山元十郎、「北夷談」の松田任三郎らであり、間違いである。

- 昭和7-8年古書店で発見の写本「蝦夷地開発記」/鈴木周助は、堀田仁助一行が乗り込んだのは「休明光記1」の云う「政徳丸」ではなく、其年(1799年)相州(相模の異称)浦賀に於いて出来た千四百六十石積の朱塗唐風の船「神風丸」二番船で仁助一行である。
- 『堀田仁助の蝦夷地海路測定事蹟 一新資料「蝦夷地開発記」に就いて』 高倉新一郎によれば、未知への蝦夷航海に向けて、地詰の役人を乗せて江戸よりアッケシに直行した千二百石積「政徳丸」が一番船であると指摘。

この政徳丸の航海記は松田任三郎の「北夷談」に詳しい。

北夷談(ほくいだん)は、

寛政11年(1799) - 文化5年(1808)の松田任三郎の日記 彩色絵入、文政初年成立。

越後国頸城郡鉢崎村(現在の柏崎市)出身の松田伝十郎(1769-1843)の寛政11年(1799)蝦夷地御用掛となって以来、文政4年(1821)まで数度にわたる蝦夷地での体験を纏(まと)めたものである。文化5年(1808)間宮林蔵と共に樺太探検を行い、樺太が島であることを確認した功績がよく知られている。

それによれば、「政徳丸」は、寛政十一年三月二十四日品川を發し、難航を重ね四月二十九日南部の宮古に達す。宮古で風待ちすること38日(4月.2日、5月.29日、6月.7日)。六月七日出立し、漂流といえる有様で六月廿日釧路着、六月二十九日アッケシ入津した。

「北海道志」の日付けは恐らくこれに拠ったと高倉新一郎は指摘している。

その根拠は、仁助の事蹟を記録した道中手扣(どうちゅうてびかえ)の写本「蝦夷地開発記」/鈴木周助が昭和7年(1932)に発見され真相が明らかになった以前に成立した「北夷談」に拠ったと判断したのであろう。

- 「政徳丸」は、霧にさえぎられ海中に漂うこと四日、「船中一同疑惑を生じ、いづれの針路に乗ってしかるべきや評議に及ぶ共誰か一人針路を申出る者なく、もつとも船頭露木元右エ門ほか船手の者共蝦夷地は初めてにて不案内なり。仍て船中一同水を浴び信心いたし方角を書付いづれの針路を乗りてしかるべきや「神慮(天意)」を伺う船方の法を以て籤を取る処、子の針路に乗り申すべきとの神告にてそれより子走りに針路を定め神慮に任せる」といったような心細い航海を続け日高沖に漂流し、難航に難航を重ねたあげく29日ようやくクシロへたどり着いた。

- 「北海道と島根縣」札幌島根縣郷友會 昭和6年(1931)刊では、幕末の元津和野藩士宮崎幸曆が私と同じような疑問を持って仁助の履歴のつじつまが合わないことに苦慮しながら調べていた。

現在未確認だが「津和野町役場所蔵の文書」を以って堀田家に伝わるものとして発表された由緒書と《⑫『史料紹介「蝦夷地開発記」と堀田仁助の由緒書』平成21年(2009年)3月刊》を比較対比し、生年、履歴年、事蹟の船名、日付等に差異あり、いずれを信すべきか等と指摘し、後来確実の記録世に出づるを待つとしている。

尚、参考：写本「蝦夷地開発記」/鈴木周助」は、北大付属図書館の「北方資料データベース」が、平成5年から平成20年(2008)にかけて構築された時にデジタル化され公開中である。

[\[目次へ戻る\]](#)

[《トップページへ》](#)

4. 羽太の休明光記の錯誤の意味とは。

堀田仁助の由緒書以外の記録は長年検索しても力及ばず発見できなかった。伊能忠敬のように、筆まめであって、後世に残すために、日記にしたためておけば、後人は助かる。

幕府の信頼を得てからの忠敬の全国の測量は、幕府の一大プロジェクトとしてお墨付きに格上げされたことから、忠敬は日々こまめに日記にしたため、文書として後世に残そうとしたのではないか。この筆まめが、思いもよらぬサブタイトルの「評価されない裏事情」の解明につながったのである。

錯誤のヒントは

伊能忠敬の「測量日記 第一巻 一幕府への交渉記」寛政12年(1800)にあり、非常に興味深いことが綴られていた。まさかの「蝦夷地御用掛」の仁助や忠敬に対する考え方を知り得たのである。

幕府はロシアの南下(来寇(らいこう)・・・侵略)に直面して、安全で最短の海路を武器や兵を船で運ぶつもりで、少しでも正確な蝦夷地の地形だけが知りたかった。

しかし、高橋至時・伊能忠敬の師弟の測量の目的は、別にあり、この機会に緯度1度に対する地表の距離を確定し、地球の大きさを知りたいという思惑があった。

InoPedia-伊能忠敬試料室-一般的な資料(1) - ⑰桑原隆朝(その2) 安藤由紀子より引用
(2013年時点オープンで収集も、現在 InoPedia 研究論文はECショップでのみ購入に限られる)

●『測量日記 第一巻』より抄録(抜き書き)』

予想だにできなかった仁助が記録されている貴重な情報源である。

内容は武士と富裕な民との癒着が堂々と記されている。このあたりについては、なぜか、InoPedia 研究論文では一切触れていない。

■寛政12年(1800)

◆2月15日

至時より急の呼び出しで、老中秘書奥御祐筆 秋山様から伊能の身分と領主の氏名、持参する測器の数と大きさを問い合わせて来た由。いよいよ幕府が動き出した。

12:

◆2月24日

勘解由(かげゆ)は百姓身分なので、陸地の通行証文(道中の人馬を無賃で調達できる)を与えた22番地前例もなく、天測器は好きなだけ持っていけるから船の方が良いと評議された。

◆3月朔日

忠敬が一人で羽太家へ伺い、敷居をへだてた対面で「一、二年の測量では測りきれまい。松平信濃守はじめ蝦夷掛一同の頼みは、蝦夷地へ住み込み、蝦夷人を教育し、田畑を開かせて貰いたい」と。

◆4月5日

百姓身分の忠敬には、四千石の書院番頭松平信濃守忠明クラスになると、武士の付き添い(い)が要るらしく、忠敬の師 高橋至時は御徒目付細見権十郎に相談し、自分の部下(かどくらはやと)の門倉隼人(つ)を付き添わせることにした。

◆4月7日

●四ツ頃(10時ごろ)八丁堀 中の橋(なかのばし)で待ち合わせ、隼人(はやと)と忠敬は松平家へ出かけ、玄関で細身様を呼び出し、隼人殿「佐原村百姓伊能勘解由(かげゆ)、参上させました」とか何とか口上を言ってすぐお帰りになった。その形式主義がおもしろい。

例によって長く待たされ夕食をご馳走になった。

そして、奥の間に案内され、細身様が付き添ったうえで敷居を隔(へだ)てて、三人の高級官僚御書院番頭(まつだいらしなのかみただあきら)(役高四千石松平信濃守忠明様、御勘定奉行(いしかわきこんのしょうげんだふさ)(役高三千石)石川左近将監多忠房様、御目付(はぶとしょうさえもんまさやす)(役高千石)羽太庄左衛門正養様)に対面を許された。

松平信濃守様が、また「なぜ船ではだめなのか」、「海上測量は不得手の上、長い船旅は難渋します」と申し上げると、

松平信濃守様「今後の御船通行のために、(先年)堀田仁助へ海上測量を申し付たところ、帰りはやはり陸を帰ってきたことは不埒な(ふらち/けしからぬ)ことである。

「陸地ではなかなか海路のことはわかるまい」と仰せなので、「蝦夷地より奥州、江戸まで連続した海路が分かるのです」と申し上げた。

「再三、堀田仁助を知っているかと聞かれたので、仕方なく知っています」と申し上げた。

忠敬の腹の内には仁助への対抗心がありありと見てとれる。

しかし海路を知るためには正しい陸地の形状が必要なことを、松平信濃守を粘り強く納得させた忠敬の思惑をエリートの松平信濃守は気がつかないのである。

松平信濃守様「来月出立9月帰府では満足な測量はできない。天には詳しいのに、芥子粒(けしつぶ)ほどの蝦夷地には暗いのお」とお笑いなされた。これは完全に信濃守を見縊(みくび)った態度である。

蝦夷地御用掛筆頭とにやり取りから、幕府はいったん武器や兵士を船で運ぶつもりであり、安全で最短の海路と、蝦夷地の地形だけが知りたかったことが分かる。そのために、新造船「政徳丸」まで作っている。

●勘定奉行石川将監様は書き物の手を休め、我が方をお向きになって「そなたは天文に詳しい人物とのみに思っていたが、代々の家柄で、人情厚いそなたを蝦夷地へ遣(つか)わして、測量不成

功に終わらせたくはないから、来春に延ばした方が良いと私は思ったのだ」とおっしゃった。御親切なこの一言、身に染みてありがたく思った。

松平様、先年堀田仁助の作った絵図ともう一種類、2枚を貸して下さい。

ずっと付き添っていた御徒目付おかしめつけの細見権十郎は蝦夷地にくわしく、帰り際「波が荒く天測器具を船で継走(リレー)するのはむずかしいぞ」と言われた。下がって、高橋先生宅へ回り報告。実は、細見は昨年寛政11年2月から11月まで蝦夷地に派遣され、6月熊を仕留めたことで知られる人物である。

●4月7日の条には堀田仁助の名前が3ヶ所出てくる。

測量日記の2月24日から4月7日の記述を読み込めば読み込むほどに、その行間から浮かび上がる蝦夷地御用掛5人の有司と伊能忠敬とのグレーな関係を感じるようになった。

☑ (参考：伊能忠敬研究17号「伊能家文書紹介十 その一」桑原隆朝 安藤由紀子より引用)
(現在この資料は2013年時点オープンで収集も、現在InoPedia 研究論文はECショップでのみ購入に限られる)

★この強気の裏に何が隠されているのか数日調査して分かったことがある。

それは堀田仁助には、思うに、思想・信条などが背景にあり、それを成り立たせている考え方からして到底真似のできないことであったと見る。

伊能忠敬は妻に縁がうすい男だったようで、初婚ミチ、再婚 法名は妙諦、お信のぶ、お栄だった。妙諦の死後、縁あって仙台藩の江戸詰め上級藩医400石の桑原隆朝の娘・お信のぶ(お信は出戻りで子供もあった)を妻に迎える。

400石という高給の藩医は藩邸の外の町屋に住む名医で、他の藩邸からも診察の要望があったという。しぜんに政界の情報にも通じていたと考えられる。

忠敬は、非常に運がよくて、次つぎに強力な支援者が現れて順調に作業が進んだ。忠敬は四十九歳で隠居した資産家であるが、金の縁だけでは、いつれ破綻する。五十歳のとき江戸に出て、大阪から天文・暦学のよい先生が来ることを忠敬に教え、入門の世話をしたのは桑原隆朝だったと思われる。桑原は医者という立場から幕府の要路(重要な地位)とも交際があり、年寄・堀田撰津守から情報を知り、忠敬の意向を受けて働きかけ、入門を実現させた可能性が高い。

忠敬は至時の下で天文学を勉強、やがて寛政12年(1800年)から測量隊を率いて日本の測量と地図作成が始まっていくが、第1回目の測量から桑原が忠敬に向けて幕府へ次の測量申請を勧めている。桑原はある人物の意向で手続きを伝えているが、この人物は若年寄堀田正敦わかどしよりほったまさあつとされ、幕府はまだ援助出来ないが、地図がよく出来ていることと測量継続を内密に忠敬へ伝えるため、桑原を介して連絡を取っていたのではないかと推測されている。

事実、正敦と桑原はこの後忠敬へ指示を送り続け、忠敬も2人と連絡を取り合っている。

- ・堀田 正敦 (ほった まさあつ) ウィキペディア
- ・桑原隆朝は伊能測量のキーマンだった (inohist.tokyo) 渡辺一郎ブログ より引用。

14:

さて、4月7日の記事には、松平信濃守、御勘定奉行石川将監、御目付羽太庄左衛門が列席していたことは明白である。堀田仁助が蝦夷地から陸路で帰ったため、海路のことが分からないとの思い込みがあり、松平信濃守は石川や羽太、忠敬の面前で、堀田仁助の所業は不埒との評価を下した。

忠敬は蝦夷から江戸までの海岸の真の方位が分かれば、陸地でも海路が分かり、日本の形が分かることを松平に力説する。

●松平から再三、堀田仁助を知っているかと聞かれたと忠敬は触れているが、これは、松平が仁助を否定し、その上忠敬の陸路行きを否定したいがためと直感的に敏感に察知し、松平の意向をそぐために、忠敬は陸地でも海路が分かることを力説したのではなかろうか。裏には当然、高橋至時との目的を幕府に秘密裏に実現するという思惑がありありと見え隠れする。

伊能忠敬は高級官僚の前でも、物おじすることなく、堂々として、目的のためには自説を曲げないしたたかさを持っている。いささか好奇心が強く、凝り性で根気づよい性格と見受けられる。幕府は金をケチりたいから、忠敬は費用を自分で出す積りなので怖いものなしなのである。

仁助の所業を不埒と断罪した情を持たない若きエリート松平信濃守の為せる業故、フロンティアとして稀な測量法により完成させ、幕府に上程した地図をいとも簡単に貸し出すことが驚くべきこと。恐らく信濃守には“仁助の上程した地図をただの絵”との認識があり、仁助、忠敬両人の測量の結果作成するであろう両者の地図を比較して評価するのが蝦夷地御用掛筆頭として当然とみるが、忠敬に前もって見せることの意義は何なのか、理解に苦しむところではある。

百姓身分の忠敬には、謁見が大名クラスとなると、武士の付き添いが要る。敷居を隔てての会見をする人物に対する処遇とは思えない。

✓第一・第二次測量行では、幕府は「伊能忠敬」なる者について何も知らず、また天文方高橋至時と忠敬の師弟は、幕府にどれだけやる気があるのか、両者手探りの状態だった。

この暗闇状態に風穴を開けたのが忠敬の義父である桑原隆朝であった。

幕府との交渉が揉め行き詰まると、処世術に長けた忠敬は決まって桑原宅を訪れるのである。揉めごとそれは、幕府と至時・忠敬師弟の蝦夷地測量に対する思惑の大きなずれが原因である。

幕府はロシアの南下に直面し、正確な蝦夷地の地図が欲しかった。こうした幕府の外交上の焦りを利用して、秘密裏に、したたかに至時らは世界で地球の大きさが分かる緯度一度の地表の距離を確定したかったのである。

●忠敬の背後に“桑原隆朝と堀田正敦の影”が見え隠れする

忠敬の背後にある影の人物のことは、恐らく筆頭松平はじめ羽太らは当然承知しているはずであろう。羽太は松平の判断を重く受け止め、保身のために第一陣の政徳丸に天文に暗い船頭や官吏のみで蝦夷地に向かわせ、安全・安心で速い航路の開拓を自然の脅威とはいえ、海上試験を失敗させたことを隠ぺいしたいがため、さらに「蝦夷地取締御用掛」の権力組織の面子を守るためにも、仁助が帰路を陸路で帰ったことを咎め、これをもって意図的に乗っていない政徳丸に仁助が乗ったこととして、記録を改ざんし「休明光記巻の一」に書いたのではないかと考えるのが自然であろう。正規の記録文書は「休明光記付録1」に残している。

有能な有司（官吏）の羽太が忠敬との会合に幾度も立ち会い、蝦夷地取締御用掛のメンバーとして評議した立場の人物である。政徳丸には乗らず、仁助は二番の神風丸に乗り、忠敬は陸路を主張したことは十分承知していたことは、忠敬の測量日記（本 12 頁）で明らかである。

「休明光記」成立

羽太正養^{はぶとまさやす}（1754-1814）が寛政 11 年（1799）に蝦夷地取締御用掛を命ぜられてから、函館奉行、松前奉行として、蝦夷地経営の官僚であった文化 4 年（1807）の異国船来航にいたる事跡や幕府の蝦夷地直轄の状況を知る等、資料を基に丹念に時代の記録をまとめ、後世に残す意思があつて書いたものが「休明光記」である。（「休明光記」羽太庄左衛門正養 北方未公開古文書集成 第 4 巻所収「エリート官僚が書いた休明光記」）。

☑ 休明光記は、羽太が政徳丸即ち堀田仁助の図式部分を意図があつて単に記述を誤つたための錯誤とは考えにくい。

- 「蝦夷地取締御用掛」の組織の解体は享和 2 年（1802）。
- 「蝦夷地開発記」鈴木周助 写本（手書きの本）文化元年（1804）成立。（仁助の事蹟 5 年後）堀田仁助の 1799 年の事蹟を明らかにする唯一である写本が発見されたのが文化元年（1804）の 128 年後の昭和 7 年（1932）であるという如何ともし難い時間差。
- 組織筆頭の松平信濃守は文化 2 年（1805）駿府城代屋敷で病死している。
- 「休明光記の写本（手書きの本）」は、文化 4 年（1807）成立である。（蝦夷地開発記成立 3 年後）

☑ これらから勘案すると、仁助の事蹟 5 年後蝦夷地開発記成立、その 3 年後に休明光記成立。蝦夷地開発記成立後昭和 7 年（1932）の発見まで日の目を見ていなかった。この不明早期の間に休明光記が成立しており、また文政初年成立（1818～）北夷談により仁助の乗組んだ神風丸、政徳丸に乗込んだとする休明光記は虚偽の記載が明らかである。北夷談成立前 羽太は 1814 年没。

羽太は仁助に関する事蹟本（蝦夷地開発記）は存在しないと見たか、またはひそかに抹殺したか 128 年も行方知らずとは、合点がいかぬ。

羽太は筆頭の松平が 2 年前に亡くなっている今、仁助如きの事蹟はとるに足らぬもの、些細で微々たるものと事実を歪曲（わいきょく）し、休明光記を成立させ、闇から闇に葬つたという魂胆か。官僚の悪知恵、現在になって“ぼろ”が出る。いかにも ・・・のお（悪よのお）。

松平信濃守忠明の人物評

松平忠明は、豊後岡藩主中川久貞の子で、信濃塩崎陣屋 5000 石松平忠常の婿養子となり、のち第 3 代当主となる。寛政 10 年（1798）幕府が蝦夷地を直轄化し、寛政 11 年（1799）「蝦夷地御用掛」の筆頭に任命され、東蝦夷地を仮上知し、1802 年（享和 2）永久上知として蝦夷地御用掛を蝦夷奉行、ついで箱館奉行と改め、蝦夷地（北海道）の本格的な経営に着手した。

享和 2 年（1802 年）2 月 23 日に松平忠明以下の「蝦夷地御用掛」は免じられ（3 年間の任用）、新たに蝦夷奉行（のち箱館奉行）が置かれるとともに（初代奉行は戸川安論と羽太正養）、東蝦夷地の幕府永久直轄が定められた 3 年務めたのち組織は解体された。享和二年（1802）駿府城代へ、

16:

3年後の文化二年（1805）[駿府に於いて死去](#)。信濃守らしい太く短くの生きざまに、遠山景晋・最上徳内・さらに堀田仁助も翻弄されたのであろう。

<余談>松平評 松平信濃守じんじょ仁恕無き性格明らかに！！

間宮林蔵の直属の上司であり、町奉行遠山金四郎景元（かげもと（遠山の金さん）の父親遠山景晋（かげみち）は、その著「未曾有記」において、松平信濃守について、その強勇ごうゆうあまりて、いさゝか仁恕（じんじょ情け深い思いやり）を欠いてと直言ちよくげんしており、年少気鋭のエリート松平信濃守は充分に部下の信服を得ていなかったようある。

また、樺太などの探検家で知られる最上徳内も御用筋の伺書を出したとき、そのうかがいしよひけん信濃守其伺書披見もせず、遥かほどへてに程経て封のまゝにて返せし。此事につき徳内大いにいきどおり憤りて、信濃守と大きに取りあつた。信濃守も当惑し、それより徳内は蝦夷地御用を離れたという（参照：[日本ペンクラブ電子文藝館「最上徳内」](#) 3/33 頁より引用）

羽太正養（はぶと まさやす）

生年：保暦2（1752） 没年：文化11（1814）

江戸後期の幕臣。通称左近、主膳、庄左衛門、安芸守。役高1000石。

寛政8年（1796）5月目付、同11年（1799）蝦夷地幕領化の際、蝦夷地取締御用掛に3年間任じられ、享和2年（1802）に箱館奉行が新設されると、戸川安論共とがわやすともに着任。文化4年（1807）西蝦夷地も幕領となり、同年10月松前に箱館奉行を移して松前奉行と改称された。



（羽太安芸守正養）

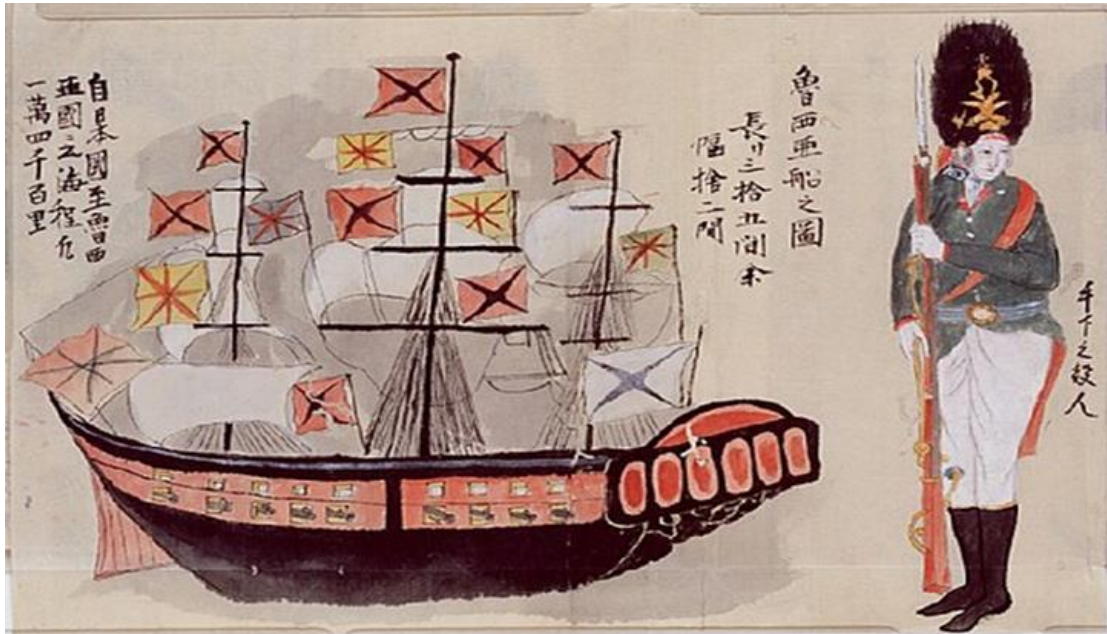
折しもロシア使節レザーノフが対日通商要求を拒否されたことから択捉島などを襲撃する事件が起き、羽太正養は処理に苦慮した。彼はロシアは戦争を好まぬと判断したが、戦闘で日本側が敗退した文化露寇の責任を問われ、文化4年（1807）11月罷免、文化5年（1808）4月逼塞（ひっそく）免ぜられ、小普請組入りとなる。

江戸時代 武士や僧侶に科せられた刑罰（重）⇨[塾居](#)>[閉門](#)>[逼塞](#)>[遠慮](#)>[隠居](#)>[差控](#)⇨（軽）。
蝦夷地取締御用掛に任命された寛政11年（1799）から松前奉行を罷免される文化4年（1807）までの記録を『休明光記』、『休明光記付録』に著す。ともあれ、官僚としての足跡は残した。しかしながら、優秀な官僚と目された羽太の末路の哀れは……。驕りのなせる業か。

[朝日日本歴史人物事典「羽太正養」の解説](#)より引用

文化露寇（ぶんかろうこう）は

文化3年（1806年）と文化4年（1807年）にロシア帝国から日本へ派遣された外交使節だったコライ・レザノフが部下に命じて日本側の北方の拠点を攻撃させた事件。

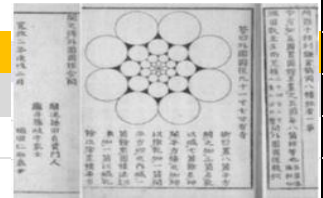
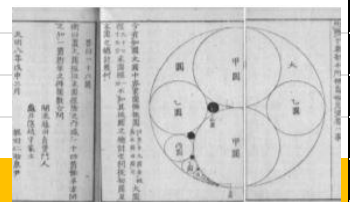


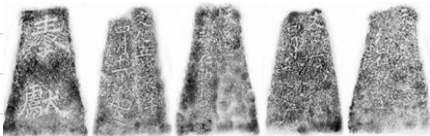
日本側が記録したレザノフの船と部下

5. 堀田仁助の由緒書 準抜粋表

No	和 暦	西 暦	日 付	数え年	宝暦 9年 より	備 考
1	延享二年(乙丑)	1745		1 歳		仁助 芸州廿日市「津和野藩船屋敷」で生誕(生年月日記載なし)
2		〃	1月11日			伊能忠敬誕生
3		1746		2 歳		
4		1747		3 歳		
5		1748		4 歳		
6		1749		5 歳		
7		1750		6 歳		
8		1751		7 歳		
9		1752		8 歳		
10		1753		9 歳		
11		1754		10 歳		
12		1755		11 歳		
13		1756		12 歳		
14		1757		13 歳		
15		1758		14 歳		
16	宝暦九年己卯	1759	7月28日	15 歳	1 年	老人扶持 御船手役所筆役見習
17	宝暦十年庚辰	1760	12月	16 歳	2 年	半扶持加増
18		1761		17 歳	3 年	
19	宝暦十二年壬午	1762	9月	18 歳	4 年	御在所へ引越
20		〃	10月21日	〃 歳	〃 年	御勘定所見習
21		〃	12月8日	歳	年	伊能忠敬の幼名三治郎は伊能家「達(ミチ)」の婿養子に入り、
22		〃		歳	年	林大学頭鳳谷が「忠敬(ただたか)」の名付け親となる
23		1763		19 歳	5 年	
24	明和元年甲申	1764	11月	歳	年	高橋至時生
25			12月	20 歳	6 年	切米四石 留守居組
26	明和二年乙酉	1765	8月	21 歳	7 年	大納戸手伝
27		〃	9月20日	〃 歳	〃 年	入門書(仮題)堀田兵之助(国立天文台調査渋川家文書)
28	明和三年丙戌	1766	2月	22 歳	8 年	甲州川 川普請手伝(甲州派遣)
29		1767		23 歳	9 年	
30		1768		24 歳	10 年	
31	明和六年己丑	1769	8月13日	25 歳	11 年	大坂派遣
32	明和七年庚寅	1770		26 歳	12 年	津和野藩の使者として小笠原台蔵と供に浜田藩に出向く
33		1771	4月6日	27 歳	13 年	1743生 渋川正清天文方となる(20歳)
34		1772		28 歳	14 年	
35		1773		29 歳	15 年	
36		1774		30 歳	16 年	
37		1775		31 歳	17 年	渋川正陽生
38		1776		32 歳	18 年	

No	和 暦	西 暦	日 付	数え年	宝暦9年より	備 考
40	安永四年	1777		33 歳	19 年	
41		1778		34 歳	20 年	
42		1779		35 歳	21 年	
41		1780		36 歳	22 年	
42		1781		37 歳	23 年	
43	天明二年壬虎	1782	6月11日	38 歳	24 年	仁助 渋川主水手附曆作御用手伝拝命 御参勤のお供で江戸に出る
44		"	10月			浅草天文台（頒曆所）設置
45	天明三年癸卯	1783	12月朔日	39 歳	25 年	式石加増 勘定者立身
46		1784		40 歳	26 年	
47		1785		41 歳	27 年	
48		1786		42 歳	28 年	
49	天明七年丁未	1787	10月15日	43 歳	29 年	高橋（渋川）景佑生
50	天明八年戊申	1788	3月	44 歳	30 年	墨田区本所 妙見堂に算額奉納
51		1789		45 歳	31 年	
52	寛永二年庚戌	1790	2月	46 歳	32 年	鎌倉市雪ノ下 鶴岡八幡宮に算額奉納
53	寛政三年辛亥	1791		47 歳	33 年	宝暦九年己卯より年数33年相勤
54		1792		48 歳	34 年	
55	寛政五年癸丑	1793		49 歳	35 年	幕府曆作御用手伝 五人扶持
56		1794		50 歳	36 年	
57		1795	11月14日	51 歳	37 年	1764生高橋至時天文方となる(32歳) 5月忠敬(51歳) 至時に入門
58	寛政八年丙辰	1796	10月	52 歳	38 年	高橋至時・間重富らによる寛政の改暦なる
59		1797		53 歳	39 年	
60		1798		54 歳	40 年	
61	寛政十一年己未	1799	3月13日	55 歳	41 年	蝦夷地御用拝命
62		"	6月15日			仁助の師 天文方渋川正清(主水) 死去 (56歳)
63		"	6月27日			
64		"	6月28日			品川沖碇泊新造船「神風丸」1460石積 総勢31人出帆
65		"	8月29日			申の刻 15:00~17:00 アッケシに入津
66		"	10月4日			渋川正陽 家督を継ぎ天文方となる(25歳)
67		"	11月15日			アッケシより松前、津軽三厩から仙台へと陸路江戸帰着
68	寛政十二年庚申	1800		56 歳	42 年	馬廻り格に昇進
69		"				「神風丸」のその後は、南部にて破船、修理し「如神丸」と改む
70		1801		57 歳	43 年	
71		1802		58 歳	44 年	
72		1803		59 歳	45 年	
73	享和四年甲子	1804	1月15日	60 歳	46 年	高橋至時没(41歳)
74	文化元年甲子	1804	4月3日			高橋景保(20)天文方 作左衛門を襲名す



No	和 暦	西 暦	日 付	数え年	宝暦9年より	備 考
75	文化元年甲子	1804	11月	60 歳	46 年	「蝦夷地開発記」鈴木周助より借写（源中控）
76	文化二年乙丑	1805	2月25日	61 歳	47 年	高橋善助（景佑）伊能忠敬第五次測量隊に従事
77						翌11月帰府
78	文化三年丙寅	1806	正月	62 歳	48 年	ニーカップ義経社（現北海道新冠町と推定）に算額奉納 ①
79	文化四年丁卯	1807	3月	63 歳	49 年	「休明光記」羽太庄左衛門正義成立、和算家の師藤田貞資没
80	文化五年戊辰	1808	1月4日			伊能忠敬 五ツ半（9時）ごろ築地渋川正陽へ年始廻り
81	文化五年戊辰	1808	4月11日	64 歳	50 年	廿日市市佐方八幡神社に石灯笼一對寄進 ②
82	〃	〃	8月30日			高橋至時次男景佑（22歳）渋川正陽の養子となる ①
83	文化六年己巳	1809	7月22日	65 歳	51 年	養父正陽の隠居により23歳で景佑天文方
84		1810		66 歳	52 年	となる、通称助左衛門と改む
85		1811		67 歳	53 年	
86		1812		68 歳	54 年	
87		1813		69 歳	55 年	
88		1814		70 歳	56 年	
89		1815		71 歳	57 年	
90		1816		72 歳	58 年	
91	文化十四年丁丑	1817	2月2日	73 歳	59 年	
92	〃	〃				ことを許されることを、亡き師正清の養子正陽の養子高橋至時の
93	〃	〃				次男渋川助左衛門（景佑）より仰せられる
94	〃	〃				（堀田仁助は正清・正陽・景佑の三代に師事か）
95	〃	〃	4月14日	〃 歳	〃 年	式人扶持加増
96	文化十五年戊寅	1818	4月13日	74 歳	60 年	伊能忠敬没（74歳）（発表は文政4年9月4日） 文政改元4月22日
97	文政二年己卯	1819		75 歳	61 年	宝暦九年（己卯）より年数61年相勤
98	〃	1820		76 歳	62 年	
99	文政四年辛巳	1821	6月14日	77 歳	63 年	渋川正陽没（47歳）
100	〃	〃	7月			高橋景保 伊能忠敬没後「大日本沿海輿地全圖」を完成
101		1822		78 歳	64 年	
102		1823		79 歳	65 年	
103		1824		80 歳	66 年	
104		1825		81 歳	67 年	
105	文政九年丙戌	1826	9月	82 歳	68 年	9月生年82歳相成、老衰・病身にて御在所へ罷帰りたい旨、
106	〃	〃				公儀天文方へ申し上げた・・・これが生年1745年の推定理由！！
107	〃	〃	12月21日	〃	〃	新知60石被下置、来春御在所へ帰ることの達しあり
108	〃	〃		〃	〃	宝暦九年（己卯）より年数68年相勤
109	文政十年丁亥	1827	6月朔日	83 歳	69 年	3日帰着の達しあり
110	〃	〃	6月3日	〃	〃	在府出立
111	〃	〃	閏6月24日	〃	〃	御在所帰着（由緒書 没年月日記述なし）
112	文政十二年己丑	1829	9月5日	85 歳	71 年	堀田泉尹没（85歳）（「近世日本天文学史（下）付録年表より）



【参考】『史料紹介「蝦夷地開発記」と堀田仁助の由緒書』岡 宏三 島根県古代文化センター
『近世日本天文学史（上・下）付録 渡辺敏夫 恒星社厚生閣
InoPedia 伊能忠敬史料室—一般的な史・資料(3) /Wikipedia『天文方』最終更新2012年6月12日08:22